
身勝手な償い

Kazuya2009

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身勝手な償い

【Nコード】

N7014H

【作者名】

Kazuya2009

【あらすじ】

学生の頃、自身の保身のために幼馴染を売った。その償いのため、身勝手な償いを心に決める。彼のとった行動は果たして誰のためのものなのか…。

（前書き）

酷い話になっています。

感情的になれる方は出来るだけ読まないで頂けると幸いです。

体に鋭い痛みが走る。

それがもう自分の命がもう無いのだというのを伝えていた。

「ねえ、どうかしたの？」

そう尋ねるのは幼馴染の琴美だった。

くるっとした小動物を思わせるような目にボブカットの女性だ。

幸一は痛みを顔に出さないように笑顔で答える。

「ん？ どうして？」

「何か、今顔が歪んだような…」

「気のせいだよ。それよりその彼に告白するんでしょ？ どうするのさ」

「あ、そうだったよね」

顔を赤くしながらどうしようかと幸一に相談する琴美。

その笑顔を見ながら、幸一はまだ死ねない。

琴美が幸せになるまでは俺は死ねないんだと思っていた。

幸一は中学の時に幼馴染の琴美をだまして一度だけ不良グループに売ったことがある。

事情を聞けばなんて事無い。

不良グループが琴美に目を付けていたのが理由の一つで、もう一つ幸一を脅す材料があっただけの話だ。

一回の万引き。

ホントに些細なことだった。

幸一が万引きしたところを不良グループに写真で取られていたのだ。

そして、脅された幸一は人気の高かった琴美をだまして体育倉庫に連れて来いといったのだ。

幸一は断ったが、写真を学校どこか近所中にばら撒くといわれ

て従うしかなかった。

ただ、最後まで幸一は抵抗をしていた。

不良グループが琴美を襲うのを確認するとすぐさま学校の外の公衆電話から学校へ通報したのだ。

幸い、琴美は服を脱がされただけで済んだ。

その心の傷は残ったままだが。

琴美はずっと幸一が自分を売ったことを知らなかった。

幸一もずっと言えずにいた。

だから幸一は一つだけ心に決めたのだ。

琴美が本当の幸せを手にするまで自分の全てを尽くそうと。

いろいろな面で幸一は努力した勉強などとして、琴美を勉学の面からも支えられるようにもした。

体も鍛えて、時折どうしようもない男が声をかけてくる時もさりげなく妨害をしていた。

恋愛面でもずっと支えてきた。

一度琴美から告白された時もあつたが、幼馴染以上には見れないと断った。

幸一には琴美を受け入れる資格は無かったのだから…。

時は過ぎた。

幸一は一枚のはがきを見て微笑んでいた。

はがきは綺麗なウィディング姿の琴美と誠実そうな男性が写っている。

「やっと、幸せになれたな…。ぐっ！」

口元を押さえる幸一。

そこには大量の血があつた。

幸一は末期の癌だった。

見つかったときにはすでに手遅れで、持って三カ月といわれていた。

しかし、すでに一年以上も体を持たせていた。

全ては琴美が幸せになるまでと、執念だけで生きていたのだ。

「ははは…」

その血を見て、幸一は笑う。

部屋のベッドに転がるとその笑いは大きくなった。

「あはははは！」

その笑いは歓喜の笑いなのか？ それとも…。

「これで俺の役目も終わりだな…」

そういうと幸一は電話会社への電話をし、電話の解約を済ませる。
最後に用意していた一通の手紙を出しに外へといった。

「あれ？」

琴美は携帯電話をかけて首をかしげた。

幸一への電話が通じないのである。

「どうした？」

琴美の夫がはがきを持ちながらリビングに入ってきた。

「あ、うん。幸一君に結婚式の電話をしようとかけたんだけど通じなくて…」

琴美はそういうと困ったように電話を見る。

夫は怪訝な表情をすると、手紙を琴美に見せた。

「え？ 海外に？」

その手紙には仕事の関係で海外に行くことになった旨と、それによつてしばらく連絡が取れないことがかかれていた。

最後に落ち着いたら連絡するよと一言を添えて。

「がっかりだなー」

「そうだな。彼のおかげで俺達は一緒になれたようなものだしな」

琴美の夫がそつと琴美の肩を抱く。

琴美もそうだねって言いながら彼に体を預けていた。

幸一は部屋で倒れていた。

口からは大量の血液が流れている。

しかし、その顔は酷く嬉しそうな表情だった。

それは琴美が幸せになったからだろうか？

それとも自分の勝手な償いを果たしたからだろうか？

彼が息を引き取った以上、そのことは分らない。

少なくとも幸一はこの世を去ることに關しては何にも思っていない
かったのだろう。

しかし、これで本当に彼が償いを果たしていたのだろうか？

数年後。

琴美は親友から幸一が死んでいたことを告げられた。

知人にはすでに自分が危ないことを伝えていたらしい。

そして琴美達だけは幸せな絶頂にあるから伝えないでほしいとい
っていたのだ。

その話を聞いた琴美は夫共に彼のお墓に来ていた。

二人は彼の墓石で共に涙を流したという。

幸一へ感謝の思いを伝えて…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7014h/>

身勝手な償い

2010年10月11日00時19分発行